

播磨の古代寺院と造寺・知識集団 46

— 芦屋廃寺・葦屋駅家を中心に —

寺 岡 洋

古代寺院と駅家（うまや）

今回は古代寺院と古代山陽道に設置された駅家をセットで取り上げる。古代寺院と古代山陽道・駅家は、初期律令国家の重要な施策の一環であった。山陽道では駅家近くに寺院が立地する例が少なからず見られる。西摂から播磨までの「駅家・近隣の古代寺院」を一瞥する。

葦屋駅家（菟原郡／神戸・芦屋市）— 芦屋廃寺

須磨駅家（八部郡／神戸市）

明石駅家（明石郡／明石市）— 太寺廃寺

邑美駅家（明石郡／明石市） *廃止駅（仮称）

加古駅家（賀古郡／加古川市）— 野口廃寺

佐突駅家（印南郡／姫路市） *廃止駅

草上駅家（飾磨郡／姫路市）— 辻井廃寺・今宿廃寺

大市駅家（揖保郡／姫路市）— 西脇廃寺

布勢駅家（揖保郡／たつの市）— 小犬丸中谷廃寺

高田駅家（赤穂郡／上郡町）— 神明寺廃寺

野磨駅家（赤穂郡／上郡町）

ここに挙げた11ヶ所の駅家（2ヶ所は平安時代までに廃駅）のうち、7ヶ所は周辺に寺院が建立されている。隣接して古代寺院が見られない須磨駅家も近隣の山陽道沿いに房王寺廃寺（神戸市）が建立されている。

ちなみに前回紹介した伊丹廃寺は山陽道を見下ろす位置に、前々回紹介した猪名寺廃寺は難波から有馬への古道（有馬道）沿いに立地する。

芦屋廃寺址

立地 芦屋廃寺の所在地は芦屋川右岸、芦屋川扇状地の傾斜が顕著になる標高28m～34mに立地する。阪急電車神戸線に接して北側になる。足下の山陽道や沿岸の船から六甲の緑を背景に伽藍が目立ったであろう。

遺構（建物基壇など）が確認された芦屋廃寺跡（第62地点）は、阪急芦屋川駅（南流する芦屋川を跨いで造られている）を山側（北）に出て、山手商店街を西へ300mばかり歩くと、道路脇に「芦屋廃寺址」の碑があり（右上）、さらに50mばかり西、マンションが調査地。見えにくいが入口脇に軒丸瓦をあしらった「芦屋廃寺跡」の小さな金属板が嵌め込まれている（右上）。

道路と阪急電車路線とは3～4mの比高差があり、西

は谷状の地形になっている。六甲山の前山から海岸に延びる小尾根を整地して寺院を建立したようである。

スタンプにより「寺」字が刻印された鉄鉢形須恵器（仏具）や燈明用の器が出土した調査地である「第75地点」は、50m程北に位置するが、場所の特定は難しい。

■芦屋廃寺跡（第62地点）

芦屋廃寺址は瓦の出土や塔心礎の存在からはやくから古代寺院の存在が推定され、1960年代半ばからは住宅建設に伴う発掘調査が行われてきた。ただ、寺院の建物遺構は確認されず、「幻の芦屋廃寺」であったが芦屋廃寺跡（第62地点 右図）でついに建物基壇が検出された。詳細な「現地説明会ノート」が作成されている〔芦屋市1999〕。



建物基壇 調査地は傾斜面を整地した段差により二分され、高い方を北地区、南の低いほうを南地区と呼称している。北地区では現地表面下10～15cmの浅い所から安定した整地面が三面重なり、現地表面下70cmで確認された最下層の整地層が創建期の金堂基壇と推定された。礎石とも考えられる石が1個残る。包含土器片は7世紀中葉～後半頃までの時期のものを下限としており、基壇築造時期を推定できる。

基壇は、創建基壇（7世紀末）→再建基壇I→再建基壇II（小規模な仏堂か 中世末期～近世）と小規模になるが、法灯は受け継がれていたようである。古代寺院址に後代の薬師堂などが建つ例はよくみられる。

下成（かせい）基壇と思われる地覆石（じふくいし）

段差に沿って平行して直線に並ぶ石列が検出され、下成基壇（二重になる基壇の下段のほう）の地覆石（基壇が地面に接する個所に置かれる石）か、もしくは再建基壇の延石（のべいし 地覆石の下に置く石）と推測された。

これらの石列は基壇の南西隅と推定され、東西幅は少なくとも12～13mと推定されている。

特殊な大型壇（せん）

土坑（穴）から類例のない形態の大型の壇が出土している。基壇や須弥壇（仏像を安置する壇）に用いられたと推測されている。壇を使った寺院は希である。

南地区一平坦部

南地区では掘立柱建物の柱穴が200余基検出され、弥生時代以来の集落が存在していた。寺院の遺構である中門址や柵列は明確には確認できなかった。

■芦屋廃寺跡（第75地点）

調査地は西側に旧東川の谷筋が残る傾斜地で、遺物が局所的に集中しており、廃棄土坑のような堆積状況を示している。2区と名付けられた調査区の最下層（現地表下2.4m）からは5200余点もの土器片や瓦片、墨書き土器などが収集され、炉壁・鋳型片、焼土なども交じる。



とりわけ鉄鉢形の器（右図）が注目される〔芦屋市2001〕。

「寺」字の入った鉄鉢形器

出土した土器の年代は、平城宮土器編年の8世紀中頃（750年前後）のものとされる。おおよそ聖武・孝謙天皇の頃になる。鉄鉢形器という器種は「仏道を学ぶものの食器」であり、日常雑器ではない。それが8点もまとまって出土した。なにか重要な法会（ほうえ）に使われた後に放棄されたものであろうか。時期的には東大寺大仏が完成・開眼供養されたころである。それとも寺の廃絶時に放棄されたものか。

油痕の付いた杯（つき）や皿類が多く出土しており、「万灯供養」や、「万灯会（まんとうえ）」などの「仏会（ぶつえ）」が行われていたのである。

これらの遺物のから、常住する僧がいたと考えられ、僧堂（僧の居住の場）・食堂（じきどう）などと研修の場でもある講堂が存在したことが想定できる。鍛冶工房などの雑舎があったことは遺物からうかがえる。

■芦屋廃寺出土の軒瓦

芦屋廃寺の創建を主導したのは文献資料に多く見られる葦屋漢人など渡来系氏族とされる〔網1997他〕。周辺の遺跡もそれを裏付ける。瓦はどうであろうか。

出土した古代の軒瓦は、

軒丸瓦9種類、軒平瓦7種類ほどになる〔大脇2015他〕。

法隆寺式と呼ばれる軒瓦（上図）のうち「面違鋸歯文縁（めんだがいきょしもんえん）複弁蓮華文軒丸瓦」は大和平隆寺（平群寺）例に酷似する一方で、「忍冬唐草文（にんどうからくさもん）軒平瓦」は大和法輪寺（三井寺）例に酷似する〔山崎2008〕。年代については670年代後半以降の天武朝（672～686）の瓦とされる。

法隆寺式軒瓦は百済と関係があると山崎氏は指摘されており、『むくげ通信』で紹介した〔寺岡2015〕。法隆寺・四天王寺は百済人ととの関係が深いとされる。

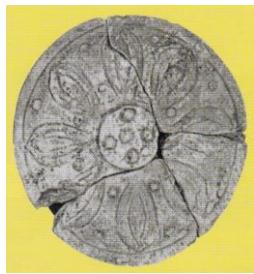
軒丸瓦に関して山崎氏は平隆寺と共に大和・長林寺例を取り上げられており、長林寺の建立は、渡来系の日佐（おさ）氏を挙げられている。日佐は外交に欠かせない通訳の訳語（おさ）である。長林寺金堂は瓦積基壇。

芦屋廃寺出土の忍冬唐草文軒平瓦の祖型は斑鳩の法輪寺216D型式とされ、法輪寺（三井寺）は、「百済の僧が衆人を率いて造った」とある（『上宮聖徳太子伝補闕記』平安時代前期の成立）。

藤原宮系の軒瓦（右図）は奈良時代初めころ、さらに重圈文軒丸瓦・重孤文軒平瓦は奈良時代中期の難波宮と関連する。瓦からみると、芦屋廃寺の建立を主導した人物・氏族は中央政権と密接であったようである。



ひとわ異彩を放つのは、「いわゆる高句麗様式の延長線上に位置づけられる軒丸瓦」（右図）で、弁間に珠点が2個ずつ配され、重弁のように見える花弁は凹む。ただ法隆寺式や藤原宮式の軒丸瓦に較べ面径が小さいので、開山堂のような堂が存在したのであろうか。



■芦屋廃寺と同范瓦を共有する寺院群

以上の軒瓦以外に、摂津四天王寺、西摂の4ヶ寺、東播磨の太寺廃寺（明石市）に分布する軒瓦の存在が注目される。森岡秀人氏により「剣状花紋系軒瓦」（下図）と命名されたもので〔森岡2011〕、「蓮弁の先端が剣のように尖る細弁12弁蓮華紋軒丸瓦と、蕨手状に退化した均整唐草文軒平瓦」である〔大脇2015〕。



軒丸瓦は房王寺（ぼうおうじ）廃寺（神戸市）・金寺山（かなでらやま）廃寺（豊中市）と同范で、大里（おおさと）廃寺（能勢郡）と同紋になる。

軒平瓦は、房王寺廃寺と同范か？とされ、四天王寺・太寺廃寺からは同紋のものがみられる（下図）。

これらの軒瓦から、奈良時代末には西摂～播磨明石郡にまで及ぶ広範囲な在地豪族層のネットワークが形成されていたことが窺える。河辺郡の猪名寺廃寺・伊丹廃寺から出土しないのはグループが異なっていたか？



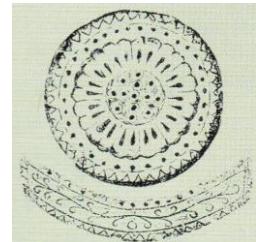
*〔大脇2015〕より引用

■葦屋漢人（あしやのあやひと）

一 芦屋廃寺創建を主導した氏族・集団

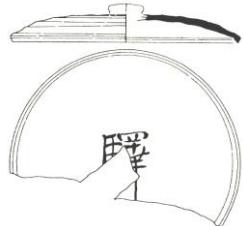
「葦屋」を冠した渡来系氏族・集団は、奈良・平安時代の資料に残る。葦屋漢人・葦屋倉人・椋人（くらひと）・蔵人・葦屋村主（すぐり）・村主などで、中心になったのが東漢（やまと）のあやひと氏系の葦屋漢人とされる。

菟原郡の状況から考えると、葦屋駅家の「驛長」・菟原郡司などは、芦屋廃寺を創建・維持運営した葦屋漢人集団からが任命された可能性が高いと考えられる。



葦屋駅家址 (深江北町遺跡・津知遺跡)

葦屋駅家址は駅家の最も主要な施設である駅館院（やっかんいん）と呼ばれる宿泊や饗宴のための建物址はまだ見つかっていないが、墨書き土器・木簡から「驛」（右図）であることは確定的である。また、葦屋駅家は時代が下ると郡家（ぐうけ）に匹敵する重要な官衙であったことが木簡から明らかになってきている。



第2次調査（1985年）では、平安時代前期の掘立柱建物群が確認され、銅製帶金具・小型銅鏡も出土し、官衙（かんが 役所）関連遺跡とされる。

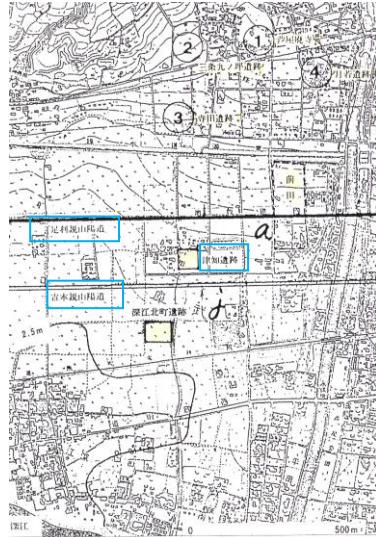
第8次調査（1999年）は阪神電車路線の南に接する位置で、動物の水飲み場のような施設が見つかり、駅馬のためのものかとも想像できる。初めて「驛」の墨書き土器が出土し、「驛家」の存在が浮上した。

津知（つじ）遺跡 深江北町遺跡に隣接するが、芦屋市域になる津知遺跡でも多くの発掘調査が行われている。

第2次調査地では平安時代前半期の掘立柱建物4棟以上、多数のピット（穴）が検出された。建物は軸線をほぼ南北に平行ないし直行させている。出土遺物は円面硯・転用硯・墨書き土器・綠釉陶器・錢貨（和同開珎・萬年通宝）、芦屋廃寺と同范とみられる単弁十九弁蓮華文軒丸瓦2点をはじめ瓦片が出土している〔森岡2008〕。駅家、あるいは菟原郡家関連施設であるとされる。

■第9次調査

阪神路線のすぐ北側、芦屋駅から西へ400m余、マンション建設とともに調査地（右図中央の□、その北側が津知遺跡）。標高3m前後の浜堤（砂堆）上に位置し、等高線（2.5m）を見ると西南側に湾入りしており、深江という地名そのものである。津（泊）が存在したかもしれない。芦屋廃寺は①、東西に走る線は山陽道想定線（北側：足利健亮説〔国道2号線と重なる〕南側：吉本昌弘説）になる。



確認された遺構は、奈良～平安時代初の掘立柱建物・南北道・柵列・溝などと共に、平安時代後期の掘立柱建物も検出され、駅家に関連する建物群と推定される。

出土遺物は、土師器・須恵器・施釉陶器・越州窯系青磁・瓦・木製品・馬歯などが見られ、39点もの墨書き土器が出土した。うち、12点は「驛」と読める。他に、「馬戸」「大垣」「東」「大西」「北」などがある。馬歯は30点も出土しており、いかにも「驛」である。

軒瓦

芦屋廃寺址出土軒瓦と同范品とみられる軒瓦が数点出土している〔神戸市2002〕。「忍冬唐草文軒平瓦・十九弁単弁蓮華文軒丸瓦など、芦屋廃寺出土瓦と同范ないし同型品が顕著にみられ」と指摘されている〔森岡2008〕。＊図版は引用・参考文献を参照

瓦葺の建物（山陽道の駅家の新羅使など賓客に格好つけるため瓦葺・白壁であった）が確認されれば駅館院であるが、報告書では「瓦葺粉壁の存在を物語るものではなく、旧東川によって上流の遺跡（芦屋廃寺）から運ばれてきたもの」と解釈されている〔神戸市2002〕。ただ、ほぼ完形の軒丸瓦もあり、津知遺跡でも瓦が出土しており、瓦葺の建物があった可能性はある。

木簡

文字資料として貴重な木簡が4点出土した。支給伝票（下記↓）・呪符・荷札・不明木簡である。

- ・「勘 戸主棕人安道 米壱斗 国儲 承和十月十日 棕人稻継 合」
- ・「勘 合」

支給伝票として使われた木簡には「承和（834～848）」という平安前期の年号と、「棕人」が2名記される。国儲（こくしょ）は摂津国の財源の米で、郡の正倉に分置されていた。つまり、菟原郡の正倉を葦屋駅家が管理していた。米の支給相手が棕人安道で、チェック（勘合）したのが棕人稻継、さらに裏面で再チェックしている。

■第12・14次調査〔神戸市2014〕

第12・14次調査は阪神電車の高架工事に伴うもので、橋梁の基礎部分を25ヶ所発掘調査した。調査地はかつての海岸で、浜堤（砂堆）と堤間湿地（ラグーン）が複雑に入り混じる地形である。最も多くの遺物が出土したB80-B区は、第9次調査地のほぼ南になる。

浜堤上では古墳時代の祭祀跡、奈良～平安時代の集落跡、湿地内では同時期の土器・木製品・木片等が夥しく出土し、駅家施設の周辺になる。木簡は24点出土し、「智識」「屋驛長」「葦屋」「棕人」など、この木簡抜きには地域史を語れないような重要なものを含んでいる。

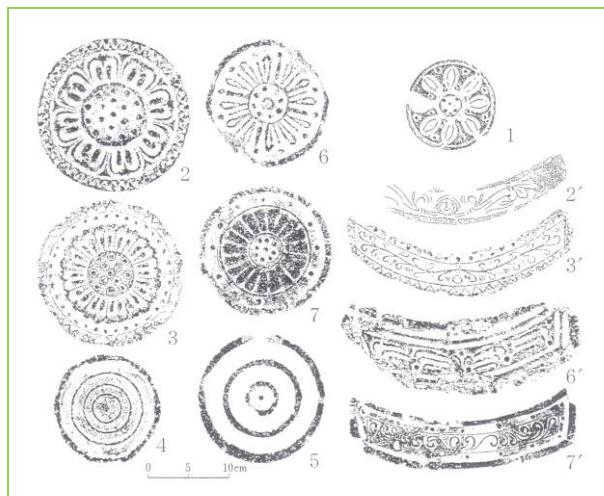
- ① 「咒願師口朝臣口成

龜智識

- ・「天平十四年八月一日口 *天平十九年か？」
- ② 「×口驛長等 口口口 *×口は葦屋か？」
- ③ 賀美里戸主葦屋賀津羅口
- ④ 「戸主棕人廣男戸馬口」

これらの木簡から、① 地方の駅家を拠点に智識（知識）活動が行われている。天平十九年（747）は大仏の鋳造事業が始まった年。智識銭のリストとされる木簡も出土しており、下級官人には半ば強制的な智識（知識）だったようだ。② 驛長がいたことが確認でき、葦屋駅家が周辺に存在したことが確定したといえる。③ 葦屋漢人と考えられている。④ 棕人は3名確認でき、相当数の居住が推測できる。ちなみに、棕人の「棕」は古代朝鮮由来の漢字（国字）である〔歴博2014〕。

■図版



芦屋廃寺の軒瓦

[大脇2015] より



芦屋廃寺

忍冬唐草文軒平瓦
(上図の2')



深江北町遺跡第9次調査 芦屋廃寺と同范の軒瓦

[神戸市2002] より



芦屋廃寺の塔心礎

芦屋市立美術博物館に移設

「心礎は上面が平滑な不整五角形の平面プランを呈する自然石で、最大長130cmを測る。高さは略測58cm。ほぼ中央に径31cm、深さ16cmの円孔（枘穴）が穿たれている」

[森岡1993] より

■引用・参考文献

芦屋市教育委員会 1999『芦屋市文化財調査報告』第34集
芦屋市教育委員会 1999.12.5

「芦屋廃寺跡（第62地点）現地説明会ノート」
芦屋市教育委員会 2001.7.15 公開展示説明会資料

「“寺”字刻印土器と芦屋廃寺跡—第75地点—」
芦屋市教育委員会 2011.3.31 「芦屋廃寺跡」*パンフ
芦屋市立美術博物館 2015

*図録

『遺跡と出土品が語る芦屋の古代』

神戸市教育委員会 2001 *図録
『古代のメインロード 山陽道沿線物語』
神戸市教育委員会 2002

『深江北町遺跡 第9次 輩屋驛家関連遺跡の調査』

神戸市教育委員会 2014 『深江北町遺跡 第12・14次』

兵庫県立考古博物館 2014 『古代官道 山陽道と駅家』

播磨考古学研究集会 2014 資料集『播磨国の駅家を探る』

播磨考古学研究集会 2015 記録集『播磨国の駅家を探る』

神戸市教育委員会 2016 『発掘 古代のお役所』 *図録

森岡秀人 1993 「伝芦屋廃寺の塔心礎(1)」

// 1994 「伝芦屋廃寺の塔心礎(2)」

芦屋市立美術博物館

森岡秀人 2001 「芦屋廃寺跡発掘調査の近情

—揖津国菟原郡の古代史動向と関連して—』

古代学研究会発表資料

森岡秀人 2007 「葦屋駅家と古代山陽道路線諸説をめぐっての一試考」

『考古学論究一小笠原好彦先生退任記念論集』

森岡秀人 2008 「考古学が語る本庄地区周辺の地域史」

『本庄村史』歴史編 本庄村史編纂委員会

森岡秀人 2011 「同じ瓦の広がり 一古代の廃寺—」

『神戸・阪神間の古代史』神戸新聞総合出版センター

森岡秀人 2012 「考古学資料からみた芦屋廃寺周辺の

古代地域構造—駅家・郡衙・火葬墓・港津・幹道・

終末期古墳などと菟原郡中枢の古代寺院—」

古代寺院史研究会発表資料

網 伸也 1997 「摂津の古墳と寺院」『季刊考古学

渡来系氏族の古墳と寺院』60 雄山閣出版

山崎信二 2008 「七世紀後半の瓦からみた朝鮮三国と日本との関係」『日韓文化財論集Ⅰ』

奈良文化財研究所・大韓民国国立文化財研究所

寺岡 洋 2012 「芦屋・東神戸地域—芦屋川から石屋川

流域—」『ひょうごの古代朝鮮文化』むくげの会

寺岡 洋 2015 「播磨の法隆寺式軒平瓦について」

『むくげ通信』268 むくげの会

国立歴史民俗博物館／平川南 2014

『古代日本と古代朝鮮の文字文化交流』大修館書店

大脇 潔 2015 「瓦からみた西摂の古代寺院」

『地域研究 いたみ』44号

渡辺晃宏 2016 「木簡から深江北町遺跡と古代の神戸を考える」神戸市埋蔵文化財センター *講演会資料